

3・12以降の具体性の知恵

森 元齋

森です。「3・12以降の具体性の知恵」というタイトルで文章¹を書きました。具体的な知恵の話までは、あまり辿り着いてはいないのですが、Whitehead 哲学に即しては、それなりに書きました。ここでは書いたことを、さらっとおさらいしつつ、それと関わることや、関わってないことなどざっくばらんに、お話をしたいと思います。

今まで、Alfred North Whitehead という哲学者を研究していました。2015 年の末に、拙著²を刊行しました。もしかしたら、Whitehead に関して書いた文章は、この *Disaster, Infrastructure and Society (DIS)* No. 6 で最後になるかもしれませんし、そうではないかもしれません。最近は、100 年前のアナキズムや戦後の思想史をお勉強しています。アナキズムについてはこの前 (2016 年の 8 月末)、スイスのアナキズム文献センターというところに行ってきた、大変充実した資料収集を行ってきました。戦後の思想については、特に福岡を中心に刊行されていた「サークル村」やその界隈を調べています。主に谷川雁さんや上野英信さんについてです。だから、ここ 100 年前のいろんな思想史と、50-60 年前の日本の思想史が、最近の関心です。自分がやっているのが哲学なのか何なのかは、もはや、謎です。

大学非常勤講師を一応やっていますが、それだけでは現金収入はほとんどないので、造園業や百姓をしています。造園業といっても、おしゃれな造園などではなく、国道沿いの植え込みの剪定だったり、公園の木を切ったり、掃除したりしています。いわゆる肉体労働です。だから、全身毛虫に刺されて、夜中痒くてのたうちまわったりしています。この前、犬鳴峠という怖い都市伝説で有名なところがあるんですが、そこでお化けを見ました。あ、嘘です。

はじめる前に

では、始めます。これまた嘘です。始めません。始める前に、ちょっといい言葉を、紹介したいと思います。9 月 13 日に、皆さん、ご存知の方がここには多いと思うのですが、道場親信さんという大変尊敬している方がお亡くなりになりました。僕は数回しかお会いしてないのですが、ご本人とのお話はもちろん、著作から大いに刺激を受けておりました。戦後の思想史をやるようになったのは、この方の著作の影響が確実にあります。この間、道場さんの『抵抗の同時代史』³をあらためてめくっていたら、一番最後の文章に強烈なことが書いてありました。こんな文章です。『抵抗』はしばしば単独者個人、強い個人による良心的行為と考えられている。しかし、実際には『抵抗』はそれを支える可視／不可視の多様な『つながり』の質に多く

¹ Mori, Motonao, 2017, “The Wisdom of Concreteness after the 12th of March,” *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan*, 6: 49-55.

² 森元齋, 2015, 『具体性の哲学——ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考』以文社。

³ 道場親信, 2008, 『抵抗の同時代史——軍事化とネオリベラリズムに抗して』人文書院。

を負っている。ネオリベラルなグローバル化と軍事化とが並行して進む今日の世界／社会再編に対し、『個』と『共同性』がせめぎ合いながらも、両者を同時に押し流していく巨大な力に抵抗し、異なる個性／共同性の模索を進めること。希望の要素は同時代経験の中に隠されたそうした模索の中にある」（道場 2008: 285-286）と。こんなカッコいい文章がこの本の締めくくりなのです。とはいえ、どういうことを言っているのか、非常に抽象的だし難しい。そうでありながらも、ビシビシ刺激してくれます。それぞれが、それぞれの仕方、しかも具体的な仕方、抽象的であり表象的な選挙とか国家レベルの話じゃなく、抵抗を試みること。そのときに、私たちが具体的な位相で、何か希望を、それこそ知恵を見出すことができるんじゃないのかなというふうに、僕は受け取りました。僕なりに解釈してみると、日々の生活に学び、もちろん歴史にも学んでいかなきゃいけない。そういうことだと思います。この間、すごくいろんな領域の人たちと話しているのですが、僕の知らないことだらけだなあと自分の至らないことを確認する一方で、いろんな大切な過去の事柄がぶった切られている感じがしています。ものすごく豊かな歴史が、日本だけではなく、世界中に散らばっている。たくさんあるのにもかかわらず、それらを学ばずに、すぐに新しい社会運動だとか、そういう言葉を発してしまっている状況が、ちょっと嫌だなと思っています。僕の場合は思想史、といっても100年前なので最近の現代思想ですけども、思想にもっと学ばないといけない。国家にはもちろん絶望しつつも、抵抗には希望を持てたらいい。もう、絶望しっぱなしなんですけども、まあ、やっぱりでも、もしかしたら希望が持てるのかもしれない。道場さんは、この希望という言葉を選んでるわけですから、やっぱり、その言葉に僕も乗っかりたいなという気持ちを新たにしました。それともうひとつですね、道場さんは永遠だぞということです。すみません、これちょっと個人的な「始める前に」でした。本編に入ります。

3・12以降の具体性の知恵

本題に入ります。「3・12以降の具体性の知恵」ですね。これ、3・12っていうのは、矢部史郎さんという方が、『3・12の思想』⁴という本を書いていらっしゃいます。その言葉です。3・12、その言葉に乗っかって、ちょっと書きました。先ほどの道場さんの言葉ですけども、「異なる個性／共同性の模索を進めること。希望の要素は同時代経験の中に隠されたそうした模索の中にある」と。一応、拙論でも、共同的なものとか個体的なものとか、それぞれ別々でありながらも瞬間的に共鳴して、それがいつなのかは、もちろんわからないのですが、出来事なるものを生ぜしめることについて、検討しています。それが一応、拙論の内容です。DISで僕が書かせてもらったのは、Bruno LatourとIsabelle Stengersの、Whiteheadの理論に基づきながら語られた出来事論です。Stengersは、よく発音されるのはイザベル・スタンジェールですが、彼女は一応フラマン語圏の人間なので、スタンジェールじゃなくてステンゲルスと発音するのが正しいようです。哲学畑の人って、こういう言葉の発音の仕方とか、いちいちチクチク言うので、一応お伝えしておきます。で、私はどんなこと書いてたのか。

事例としては、1個目は、Louis Pasteurの実験ですね。乳酸菌の発見。先ほど、主体性をモノに認めるのか、それ以外のものにも認めるのかという点だと、Latourの場合は、先ほど参照されてた論文だと思うんですけども、酵母とか乳酸菌にも認めています。たとえば、面白い文章として、こんなLatourの文章⁵があります。「もしPasteurが戸惑うならば、乳酸菌もまた戸惑う

⁴ 矢部史郎, 2012, 『3・12の思想』以文社。

⁵ Latour, Bruno, 1994, “Les objets ont-ils une histoire? Rencontre de Pasteur et de Whitehead dans un bain

のだ」(Latour 1994: 208) と言っています。要するに、乳酸菌もまた主体だし、Pasteur も主体というか主観というか、Subject をもっていて、Pasteur はもちろん一応人間なので主体をもっている。それ全体で、Pasteur と乳酸菌が一緒になったある種の何か、つまりラボそのものも主体だったりするんですね。全てが主体なんです。ま、どげん意味やろか、と。Pasteur も乳酸菌も、そのほか乳酸菌を発見するために使用された器具も、カゼインも、乳清も、リン酸塩も、全部モノだと。で、乳酸菌の発見という出来事、ないし、Whitehead の言葉だと他には現実的存在、actual entity とか actual occasion なんていう言葉があります。出来事とほぼ同義です。細かく言うとは違いますが、ここでは同義でいいです。で、乳酸菌の発見という出来事は、これらモノのある種奇跡的な出会いによる、複合的な、これまたひとつのモノです。monadology という Gottfried Wilhelm Leibniz という人が言っている面倒な議論があるのですが、その monad みたいなものです。monad とは、あらゆる精神的実体で、なおかつ、あらゆるユニット、単位が、全部ひとつの monad なんだという言い方がなされています。それと同じように、今この場も出来事だし、私っていう主体も出来事だし、このマイクも出来事なんですね。全部、出来事で、モノで、主体をもっている。いずれにせよ、抽象的で純粋培養されたモノじゃなくて、いろいろなモノが混ざり合って、それによってこそ出来事っていうのは生じるんだと。

これはおそらく、今まで何となく話していたような Latour の Actor Network Theory、実は詳しくは知らないのですが、そのことなかなと思ってます。Pasteur の発見自体も、彼の科学的探究心だけで、それが成り立っているわけじゃありません。Pasteur 自身は、これ、そんなにやりたくない仕事だったそうです。いろんな奴らの思惑ですね、いい奴もいたし悪い奴もいたわけです。Pasteur、お前実験できんだろと、やれやと言われて、Pasteur はやったわけです。そして、なんとなく乳酸菌を発見しちゃった。何が言いたいのかというと、科学的な発見、しかも、これはもっと言うと、非常に我々の手の届かぬ与り知らぬような抽象的な位相におけるレベルではなくて、むしろ具体的なレベルにおける、ある種のハイブリッド性による科学的発見なんだということです。要するに、生活に密接な仕方での有用性という観点での発見だったと。具体的な知恵の創出は、ハイブリッドなんじゃないの、ということですね。まあ、もちろん抽象的な方もおそらくハイブリッドなんでしょう。先の発表を拝聴していたら、そうなんだと思いました。ハイブリッドなものの発見は、やっぱり時間がかかります。たとえば、大学とか研究室とかが、スタッフ細胞早く発見しなさいと要請して、すぐ「ありまーす」と答えちゃうようなものではない。もっともっと喧々諤々の議論があり、何回も何回も実験をやり直すし、これはやっぱり、大学のいわゆる理系といわれるところの現場でも、それはそうだと思います。他にもいろいろあるんですけども、拙論の前半の面倒な議論は、こげん感じのことが言いたかったわけです。で、正直申し上げると、前半はどうでもいいです。個人的には、あまり関心が、もはや、ない。それに加えて、Latour と Stengers がぐだぐだ言ってるのに、私もちょっと引きずられちゃって、自分もちょっとぐだぐだ書いちゃった感じも否めない。これはちょっとよろしくない。

「この状況は危機的だ。」

そう、言いたいことを言っているのは、むしろ後半です。そこからちょっとジャンプして行って、Whitehead の言葉⁶が素敵すぎるので、みんなこれを読んで、今日、暗記して帰ってくだ

d'acide lactique,” Isabelle Stengers ed., *L'effet Whitehead*, Paris: Vrin, 196-217.

⁶ Whitehead, Alfred North, 1967, *Science and the Modern World*, New York: The Free Press. (=1981,

さい。「この状況は危機的だ」(Whitehead 1967:197) と。これは要するに、科学が専門化してしまっただけのことに対する状況です。こうした専門化は、だいたい 17 世紀ぐらいから始まってはいたようですが、産官学連携でいわゆるものすごい専門化が始まったのが、およそ 100 年ぐらい前から。産業界も含めて、それはもちろん第二次産業革命以降から、ずっとあったのはあったんですけども、それが制度化されて、大手をふるっていったのがだいたい 100 年ぐらい前。で、「この状況は危機的だ」と。これは、なんだかやばそう。それは溝にはまっちゃった精神を生み出しちゃう。「どの専門も皆進歩するが、それはそれ自身の溝での前進」だと言っています。「ところで、精神的に溝にはまっているということは、与えられた一組の抽象を眺めて暮らすことである」。要するに、溝にはまっちゃうということは、その抽象だけですね、要するに非常に純粋なピュアな、それだけの、専門的な領域を、何かいろいろぐちゃぐちゃやってるだけなんだと Whitehead は言っている。そうではなくて、溝にはまってない私たちが常に生きてる場所というのはむしろ、もっともっと広い。溝だけではない。平地もあるし、川もあるだろうし、海もあるだろうし。溝にはまっただけは、「広い天地を見渡すことを妨げ、抽象は、私たちがもはや注意を払わないものを捨象してしまう」。「無論、人生を包むに至る抽象の溝などはないだろう」。私たちの生は、考えている以上に領域が広い。そうであるにもかかわらず、溝に全部押し込んでしまうのはおかしいでしょと Whitehead 先生はおっしゃっております。「現代世界において、中世の知識階級の禁欲的な独身生活は、完全に事実を具体的に眺めることとは縁を切ることになって」しまう。本当は、もっといろんな楽しいこととかあるのに、すごい禁欲ばかりして、人生楽しくないじゃん、ということですよ。「もちろん、数学者とか法律家だけに終始する人生などは、誰もいないだろう」と。数学者だって糞するわけですよ。法律家だって飯食うわけですよ。要するに、ずっと法律だけやってるわけじゃないし、ずっと数学だけやってるわけじゃないだろうと。「人々は、その専門の職業や事業の外で生活を営んでいる」。「しかし問題は、真剣な思索が溝の中に限定されてしまうことにあるだろう」。「専門外の生活は、専門家に引き出された不完全カテゴリーによって、浅はかに取り扱われてしまう」。こうした議論を Whitehead は「置き換えられた具体性の誤謬」という言葉で批判します。要するに、具体的な私たちの今の生に対して、抽象的に語ることで事足りれりとしてしまい、勘違いしちゃってるよね、ということです。the fallacy of misplaced concreteness という言葉です。で、抽象的なだけの探求なんちゅうのは、糞くらえ、ふざけんな、と。Whitehead 先生の言う通り、そもそも私たちに、人生上の問題も含めて、数え切れないくらいいっぱいあるにもかかわらず、溝のすごい狭い問題に押し込められちゃう、あるいは抽象的な語り方のなかに限定されてしまう。もちろん溝の中や、抽象的なものを否定するのではなく、それだけでもって人生を語ってしまうとかね、それはなんか、よろしくないんじゃないの、ということですよ。

「知恵は、平衡を保った発達から生じる。」

もう一文、お土産に持って帰っていただきたい言葉があります。これも長いんですが、Whitehead の言葉です。都市論とかでも使って欲しい文言です。「現代生活への批判は、共同体の意味をどのように解釈するとしても、どこにでも適用される。これは、国民国家、都市、地方、研究機関、家族、さらには個人のいずれに適用してもかまわない。特殊な抽象的理念は発達していても、具体的な鋭い目は萎縮してきている。全体はそれが持つ諸相のひとつに没し去っている。19 世紀におけるさまざまな発見は、専門化の方向において行われ、その結果、現代

上田泰治・村上至孝訳『科学と近代世界』松籟社.)

の私たちは、知恵をより豊かにしているどころか、ますますそれを必要とする状態に置かれているということが問題だ。知恵は、平衡を保った発達から生じる。個性のこうした平衡を保った発達こそ、教育によって獲得されるべきものである。近い将来に対して、最も有益な発見は、進まざるを得ない知的専門化を損なわずに、上述した目的を推進することに関係する」(Whitehead 1967: 197-198)。ちょっと難しかったですか。何て言ってるんでしょうか。要するに、専門家の知が発達していったって、私は哲学の人ですとか、歴史社会学の人ですとか、都市社会学の人ですとか、人類学の人ですでもいいんですけども、個別具体的に学知が成立していったって、なんかあんまり実は、領域横断的に議論する場ってなかったりするわけですよ。哲学なんて、なんかもうオタクの巣窟みたくなっています。哲学の学会なんて怖いですよ。僕は Kant 学者じゃないから良かったのですが、学会とかで Kant 学者とかが発表すると、どうもその中身の議論じゃなくて、これは Immanuel Kant の『純粹理性批判』の α 版の該当箇所と β 版の該当箇所の異同からどういうふうに導き出されたものであって、かつ Keimp Smith の解釈がどーのこーので、あーだこーだを批判してるのかどうなのかとか、そういうことをずっと永遠とやってるんですよ。怖ろしいです。そういうふうになっちゃって、だんだんタコツボ化していつちゃってます。個人的には、あんまり Kant 自体が好きじゃないんですが、おそらく、Kant だってもっと中身で良いこと言っているはずなんです。それも、人生に使えるようなことだと言ってはいるはずなんです。もっと人生に使える知恵とかね、そういったものを哲学から引き出せるはずにもかかわらず、19 世紀以降は、そういうのができなくなっちゃった。それが問題だ、と Whitehead は言っています。で、もっと平衡を保った発達がいいんじゃないの、と。要するに、Whitehead は、抽象的なものとか、科学とかっていうものを完全には否定はせず、そういうのもありだし、もっと具体的な生活に根付いたうえで科学をもう一度思考できるようにしていかなくちゃいけないし、もっと感性的なものも磨いていかなくちゃいけないし、平衡を保って、ちょっとずつ進展したらいいじゃないのと、言ってます。

これは、Whitehead が影響を受けた、18 世紀から 19 世紀にかけてのイギリスの教育ってのが、バックグラウンドにあると思います。ものすごい教養に裏打ちされている。教養教育によってこそ、平衡を保った知恵の進展がありうるのだと、彼は信じてました。僕は、この今の日本の状況下において、全面的に同意するわけじゃないけど、やっぱり教養教育はすごいもちろん重要だと思っています。一応教師ですし、やはり教養教育によって、平衡を保った知恵の進展の様は伝えていくことができると思っています。もちろん今もイギリスなんかはそうですけども、本当に教養教育っていうのがすごい。今以上に 19 世紀なんかはもっとすごい。Whitehead はもともと数学者だったのに、物理学者にもなって世界的業績をたたき出してしまふ。それに加えて、哲学者にもなって、今私たちにも残るような文章を残している。当時は教養教育とその精度がものすごいんです。たとえば Whitehead の弟子に John Maynard Keynes がいたりする。経済学者ですよ。だけどイギリスには、モラル・サイエンスの伝統の枠のなかから、いろいろなものが出てくる。いわゆる教養教育でしかない。他にもたとえば今、アメリカなんかもそうですけども、専門課程は専門課程であるけど、ハーバードとか、4 年間ずっと教養教育だけをやる。専門は大学院行ってからやるわけですよ。Whitehead のこの言葉は、日本の教育機関への批判としても、使えるんじゃないかな。僕が前に非常勤やっていたある大学では、入ってから卒業するまで同じ 20 人の学生だけと知り合って、そのまま卒業しちゃう。で、何が問題になるかといったら、便所飯。要するに、友達作れなくなっちゃう。もし、最初にあぶれちゃったら、友達作れないんですよ。さらに、学校側は予算がどうのこうの言っていて、どんどんサークル潰してるんですよ。業績のあげられるサークルしかサークルとして認めませんか。じゃあ、

天文部とかどうするんだって話ですよ。星見てるだけです。業績もへったくれもないわけですよ。だけど、そういうサークル潰すわけですよ。で、本当は天体観測に興味あったかもしれない学生が学校に行けなくなってしまう。サークルにも行けない。で、一人で問題を抱え込んで。で、どうなるかっつうと、人に飯食われてる姿見られたくない、トイレで飯食う、でも拒食だから飯食えない、流す、便所飯で詰まる、それが教授会で問題になる。馬鹿かと。学生の生命を救えない大学なんて要りません。そんなんじゃないで、教育の現場でも、もっといろんな、縦横ぐちゃぐちゃしていった方が面白いんじゃないのってことは、ここからも言える。実は、Whitehead 自身、ロンドンの教育行政にもすごく深く携わって、その行政教育の長みたいなのをやったんです。だから、実は、Whitehead は教育学者としての側面もあったりもするんですが、いずれにせよ、知恵の探求って意味でも、専門だけずっとやってりゃよろしいってんじゃないで、なんかいろいろやったら、ということですよ。で、そうしないと、どんどん知恵ってのは骨太には発展していかないでしょと、言います。

生活の知恵

で、何をもってインフラと考えるかっていうのは、ちょっといまいち、まだ、ここでの共通見解は分かりませんが、なんか今まで、ない頭使ってなんとなく話を聴いていて、ちょっと今ここでインフラって言うふうには言っちゃうのは違うなと思ったんですけど、ひとまず私にとって、生活の知恵がインフラかなと思いました。基盤かな。だから、皆さんのインフラの概念と違うかもしれない。だから、さっきの水、水道のお話もありましたが、僕、田舎に住んでいて、結構みんな井戸掘って水飲んでるんですよ。なので、水欲しいなら井戸掘りゃいいじゃん。田舎に来い。で、掘り方もいろいろある。自分で5m くらい掘ったら出てくる場合もあるし、あと10m くらい掘ると、酸素足りなくてガスとか出てきちゃうから、やっぱ器具使わなくちゃいけないとか。で、器具もいくつもあるんですよ。だから掘り方もいろいろある。それ、知恵なんだと思いますよ、昔から田舎に住んでる人たちの知恵。食べ物欲しいんだったら、流通に頼る云々ではなく、田んぼ、畑、やったほうが早い。オカルトっぽいけど自然農もあるし、有機もあるし、減農薬もあるし、いっぱいあるよ。これも生活の知恵だよ。田舎いいよ。ロハスな生活で金かかるとか言っている馬鹿がいますが、お金かかりません。『天然生活』しか知らないんでしょうか。無知ですよ。実は僕自身東京出身で、しかも西の郊外で、なんかすごい殺伐として、3ヶ月にいったん誰か自殺するとか、若い人はドラッグやってたような、そういうところで育ったんで、以前はそう思っていました。思っていたというか、全く今のような生活があることすら知らなかった。だから、こういう生活が新鮮で楽しくてしょうがないんですよ。で、この歳になって初めて、鶏をしめました。多分、僕らの世代とか、よほど田舎に住んでなかったら、ほとんどそういうことした経験ないと思うんですよ。でも、僕ね、牛と豚食えないんで鶏だけ唯一食べる肉なんですけど、それぐらいは、ちゃんとして捌けるようになりたいと思って、やりました。で、しめ方もいっぱいある。でも、だいたい首ちょん切るだけなんですけど。でも、やっぱほら、怖いじゃん、目見るの。で、捌き方も、知恵。たんぱく質ほかに欲しかったら、魚釣りゃいいじゃないかと。釣りが趣味の方もいるかもしれないですけど、釣り方いっぱいありますよね。楽しいよ。こういう生活の知恵、食の知恵でもいいんですけど、意外に豊富だよ。

「地元をディグると革命が起こる」

最近の話ですけど、この糞みたいな世の中を変えたかったら、まず、歴史を学んだらいいん

じゃないかと思っています。将来の夢は、地元の郷土史家です。僕のここ数年の金言に Peter Lamborn Wilson、Hakim Bey さんの言葉があります。「地元をディグると革命が起こる」。地元を掘れば、革命が生じる。で、その言葉通り実行して、地元を掘りだしたら、自分のなかで、革命が生じちゃったんですよ。オタクのやる哲学なんて、いらねえやと。むしろ自分こそが哲学だ、歴史だと、そう思えるようになったんです。今は、たまたま福岡に住んでいて、じゃ、地元掘ろうよということで、なんか面白いことないかなと探していたら、だいたい2つ、なんとなく見当つけました。ひとつは、玄洋社ですね。で、もうひとつはサークル村です。で、玄洋社は、一時期ちょっと調べたりしていたのですが、玄洋社の残党みたいなおっさんたちが立ち寄りがたい。台湾行ったら国賓級みたいな人たち。ちょっとこれはもう無理だなと。しかも、やっぱり右翼だし。だから僕、やっぱり左派の方がいいよなと思って、サークル村について、いろいろ炭鉱労働しておじさんたちとか、谷川雁のこと大っ嫌いなおじさんとか、上野英信さん大好きっていうおじさんとかお婆さんとか、そういった人に話を聴いたりとか、あと、いろんな資料をディグったりするようになりました。で、そうすると、そのなかに、いろんなことが書かれている。ちょっと 50-60 年前のことであるにもかかわらず、知らないことばかり。たとえば、最初に座り込みをしたのとかも、実はこの頃だったりする。じゃあ、座り込みで長時間いる。特に冬だと寒い。どうするか。酒飲むんですよ。そうすると体もあつたまるし、長時間一緒にずっと座り込みできるでしょ。それも、すごい知恵ですよ。あと、警察が来たらどうするか。追い出したい。犬のウンコとか、昔だからいっぱい落ちている。それを棒の先にくっつけて、警察にこうやって、うえーうえーってやるわけですよ。それで警察を蹴散らす。まさに知恵です。

加えて、コミュンめいたものやってみようと思っています。100 年前のアナキストたちは、コミュンを作って実際に活動していたし、その残滓っていうのは今もなお、たとえばスイスやフランスにはある。スイスだったらジュラ地域ですね。時計職人の間で残っています。なので、最近スイスに行ったりして、話を聞きに行ったりしています。集中的に調べているのは、Élisée Reclus という思想家です。この人は地理学者で、活動家です。Élisée Reclus のいろんな言説、地理学はなんかちょっと難しいし、膨大な量あって、読んでもさっぱり訳わかんないのですが、Reclus の書いたアジビラとか、哲学ないし社会思想系の文章とかをディグったりして、なおかつ、この人のやってたコミュンの実践活動とか、どうやってたんだろう、どうすればうまくやってたのかなということ、調べたりしています。あと、石川三四郎もです。石川は、この Reclus に影響受けて、それこそ東京だったら千歳烏山ですね、そのあたりで、なんちゃってコミュンを作ってやっていました。これも数年しか続いてないのですが、彼は彼なりに東京で、東京っていても当時の千歳烏山なんてど田舎ですけども、やっぱり、やってた人はいる。こういう人たちから学ぼうと思っています。なにもこれ、今自分がやろうとしていることは新しいことでも何でもなし、ちょっと 100 年前にやっていた人はいたし、それで成功した人、失敗した人、いっぱいいたわけですね。で、いっぱい学べるやないかと。じゃあ、歴史に学んで、それでなおかつ現在を生きてみようと。コミュンやろうとかいうと、やったこともないおっさんたちとかは、コミュンなんか失敗するに決まってるみたいなこと言うんですよ。けども、こう返したい。お前やったことあんのか、ふざけんな。俺はやるぞと。やって失敗してから俺はいろいろ言いたい。もうすでに、今自分のなかで革命がおきまくってるわけです。超楽しいです。で、あとは、政府を転覆して国家を廃絶するっていう、これはアナキストとしてのユートピアかもしれません。理念かもしれません。理想かもしれません。けども、それを胸に生きています。これ、Reclus が言っていたいい言葉なんですけども、「ユート

ピアを持ってなかったら人は死んだも同然だ」っていう言葉があって、これ、すごい言葉だなと思っています。だから、絶望している一方で、どっかで希望を持っている。もしかしたら、良くなるんじゃないかなと思ってないと、やっぱ、やってらんないですよ。

おわりに

あらためてなんですけども、歴史をディグりまくってた道場さん、彼もやっぱりサークルです、詩をすげーディグってたわけですよ。で、これはすごいなと。僕は全然、道場さんのはるか足元にも及びません。だってもう、訳のわかんない、これ絶対読まねーだろみたいな、ほんと他人から見たらゴミみたいなもん、いっぱい集めているんですよ。で、彼の言葉ですね。やっぱ響くなど、改めて思います。「異なる個性性／共同性の模索を進めること」。もう、みんなばらばらでいいと思います。で、たまに、なんか一緒にやれる瞬間が、たまに奇跡的に起こる。それはもう、待ってるしかないです。ユートピアを胸に抱いて、待って行くしかない。革命が起きちゃうかもしれないわけですよ。「潜伏を続けて時期を待て」(DJ KENSEI feat. Stillichimiya) ですよ。もういつなのかは、わかんない。「希望の要素は同時代経験の中に隠されたそうした模索の中にある」。それをもう一度、胸に秘めながら、頑張っていきたいなと思っています。僕はこの言葉で、昨日はご飯3杯ぐらいお代わりしました。